

平成30年度新登録文化財

# 清澄園記碑

## 海苔生産用具及び関連資料35点

江東区教育委員会は、文化財保護審議会(会長中村ひろ子：元神奈川大学教授)の答申を受け、新たに2件を登録しました。そのため、登録文化財の総数は1061件となりました。



清澄園記碑



中川船番所資料館2階に展示中のベカブネ  
(海苔を採取するときに使用する船)

# 下町文化



KOTO City In TOKYO  
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.  
**285**  
2019.5.10

発行

江東区地域振興部  
文化観光課文化財係  
〒135-8383  
江東区東陽4-11-28  
TEL.(03)3647-9819  
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 平成30年度新登録文化財紹介  
清澄園記碑  
海苔生産用具及び関連資料35点
- 江戸の町内探訪⑩  
平野町
- 江東歴史紀行  
深川佐賀町河岸の風景
- 文化財のいまむかし  
関東大震災以前の石造燈明台
- 海福寺の目黒移転と馬頭観音
- 古写真の中の江東  
江東区の映画館
- 文化財説明板の紹介

### 文化財あれこれ

文化財は、昔の人々が生み出したもので、現代に伝えられた文化遺産です。その種別は多く、江東区の場合、①有形文化財②無形文化財③有形民俗文化財④無形民俗文化財⑤史跡⑥文化的景観という具合で、種別は対象となる「もの」に応じて決まります。たとえば、お寺や神社の建物などは有形文化財(建造物)となり、職人さんの伝統的な技術は「わざ」そのものが対象になりますので、無形文化財(工芸技術・生活技術)となります。職人さん自身は、昔からの技術で物を作ることができるとして「認定」されます。

ただし、種別は異なっても、これらには共通点があります。それは「むかしから伝えられたもの」「むかしから使われてきたもの」など、そのキーワードは「むかし」(伝統)ということになるでしょう。「むかし」はただ古いというだけでなく、見方をかえれば何百年にもわたり社会の発展を支え、現代社会の礎いしなになったという点で重要です。

その発展の過程を今に伝えるものが、文化財といえます。

昨年度の登録文化財を次頁で解説していますので、そのような見方をもつてご一読いただければ幸いです。

## 登録文化財

### 【有形文化財（歴史資料）】

清澄庭園記碑

清澄3-3-9 清澄庭園

大正13年（1924）6月に岩崎久彌が清澄庭園を東京市へ寄付したことを称えた石碑で、昭和4年（1929）9月に建設されました。岩崎久彌は、明治から昭和にかけての実業家です。岩崎彌太郎の長男として生まれ、叔父の彌之助（彌太郎の弟）と設立した三菱合資会社の社長を勤めました。

石碑建設の際の工事仕様書によると、石碑本体には芝公園十六号地にある六ヶ村産の切石を、台石には園内にあった自然石を使用しており、石碑の表面については平らに仕上げ、水磨きをしたとされています（清澄庭園記念碑新設工事「東京都公文書館所蔵」）。石材については、江戸城の石垣石を活用（北村信正『清澄庭園』）、石垣の要所に使われていた石と思われる（龍居庭園研究所監修『清澄庭園 景石・石造物めぐり』）などの記述もあります。が、出典・根拠などについては明示されていないため、詳細は不明です。

現在、二つの大きな野面石の上に本小松石の石碑本体が安定よく据えられています。石碑の一部に欠損は見られますが、全体的に保存状態は良好で、

刻銘の状態も良好です。建設当時の図面と比較すると、現在も当初と同じ位置に置かれていることがわかります（清澄庭園記念碑新設工事）。

碑文には、彌太郎による園地の購入、彌太郎と彌之助による庭園整備の変遷、庭園利用の実例などが記されています。

現在も多くの人々が訪れ、区民の憩いの場となっている清澄庭園の歴史の一端をうかがえる資料として価値のある文化財です。



清澄園記碑遠景



右側面



左側面

### 【有形民俗文化財】

海苔生産用具及び関連資料

35点

東陽4-11-28 江東区

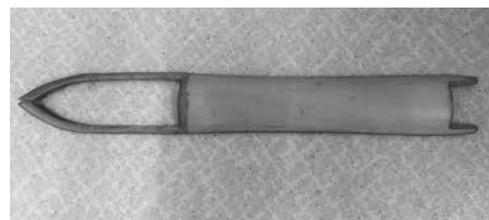
海苔生産用具及び関連資料は、江東区内にあった漁業協同組合の組合員が、昭和37年（1962）12月に漁業権を放棄する以前に海苔生産で使用していたものです。

江東区の家産生産は、明治10年代（1877）に始められたと考えられます。その後、消費の拡大とともに東京湾の一大産業に発展し、東京の前海の広い範囲にわたって養殖は行われました。

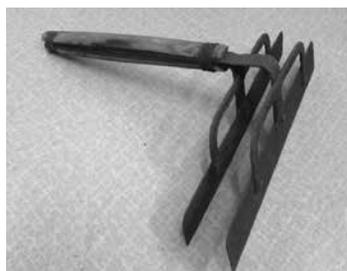
しかし、一方で東京の発展による工場や生活排水などで、湾内の水質汚染が深刻な問題となり、海苔養殖の環境は悪化の一途をたどりまし。加えて、港湾整備などをはじめとする埋め立ての拡大で、都内の漁業協同組合は



海苔干し風景（昭和30年頃）



網針（海苔網の製作・修復）



飛行機包丁（生海苔を刻む）

漁業権の放棄を余儀なくされました。当時、江東区内には深川浦、深川浦東部、城東の各漁業協同組合が存在しました。

今回登録されたベカブネ、網針、飛行機包丁、海苔簀、洗い笊、平箱などの資料は、区内における海苔生産の歴史、ひいては江戸前の

海を語るうえで欠かすことができません。また、これらの用具は秋から春の寒い季節に、海苔生産に従事した多くの生産者が区内に多く居住していたことを示すものとしても、とても重要な民俗資料といえます。

### 所在地変更

#### 【史跡】

五百羅漢跡

大島3-1、4-5

「平野町」  
ひらのちやう

今回の町内探訪は深川平野町（深川1-8付近）を取り上げます。町名の由来、名主甚四郎家の由緒など、町がその歴史について幕府に書き上げた『町方書上』（以下『書上』）を中心に見ていきます。

## 町の成立と町名の由来

平野町は、寛永18年（1641）頃からこの辺りに設けられ、元禄12年（1699）に移転した木置場を埋め立てて成立した町の一つで、埋め立てによって成立した町21ヶ町は「元木



本所深川絵図



場」と総称されました（本誌271、281号参照）。木置場の頃は、神田

久右衛門町（東神田3）の材木問屋が使用していたこと、埋め立て後の元禄14年に拝領の町屋敷や拝借地となり、残った土地を松物町（八重洲1・日本橋3）1丁目大黒屋忠兵衛、南茅場町（日本橋茅場町1・2）久下田屋吉右衛門、深川八幡前房州屋諸治兵衛、南塗師町（京橋2）孫兵衛の4人が買い受けたこと、その際、元地（屋敷地）・河岸地ともに「江戸町並同前家作御改御免」の町屋敷、すなわち江戸と同様に家屋敷を年貢の対象としたことを代官伊奈氏に願いあげ認められたことなど、町の成立と発展に関する歴史をこのように書き上げました。

町名の由来については、名主甚四郎の姓が平野氏であったことから、元禄16年（1703）に代官伊奈氏に願い上

げ認められたとあります。そして、これらのことについては、町に残された「申伝」をもとに、幕府に書き上げたと記されています。

## 町の発展と平野家

東に表通りを挟んで寺町、西に松平和泉守屋敷に面した平野町が、江戸市中に編入されたのは正徳3年（1713）です。『書上』の由緒では、この辺りの堀割が整備された元禄15年（1702）に「同所築地之木場之内等を起立仕候三付名主役被仰付、式拾式ヶ町を支配仕」、すなわち埋め立て後に複数の町が成立すると名主を命じられ、この付近22ヶ町の名主を勤めたとあります。

そこで、平野家について『書上』に記された由緒から見ましよう。

平野家は、河内国（大阪府）平野村に代々住み、親子2代にわたって織田信長、豊臣秀吉・秀頼に仕えたと記されています。しかし、子の甚右衛門が慶長20年（1615）の大坂夏の陣で討死すると、平野村にいた妻は江戸に出て浅草に居住し、男子を出産しました。その子は町人となり甚右衛門を名乗ると鉛作りを商売とし、その後の2代は酒造渡世を行ったとあります。

その後、元禄11年（1698）に始まった深川南部海岸沿いの埋め立て事業に際し、甚四郎が「御手先」（案内人の御用を命じられ、その後名主になったと記されています）

これらの内容は興味深いものです

が、信長・秀吉・大坂夏の陣などは、書き上げた当時の数百年も前のことであり、その事実関係は不明です。しかし、このような由緒を有することが、同家が名主を勤めることの正当性の一端を形作ったと考えることもできます。

## 「角木乗」のこと

平野町の『書上』には、『平野町別記』が添えられています。そこには、元禄年中に名主に取り立てられて以降の同家代々の事績などが記されています。

そのうち五代目の甚四郎の項には、享和3年（1803）3月25日に区内大島の羅漢寺方面に御成の「大納言様」（後の12代将軍徳川家慶）が「本所清水橋際より猿江御材木蔵」の水門前で「角木乗」を上覧したとの記述が見られます。現在の横十間川に架かる清水橋から猿江恩賜公園付近にあたりますが、そこで角木乗は行われ、その際に甚四郎が出て「差図」をしたことで褒美金が下されたとの事績が記されています。

『書上』を提出した文政11年（1828）にも平野町周辺に位置する木場町、宮川町、島田町など、多くの町に名主甚四郎の名が見られます。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

# 江東歴史紀行 深川佐賀町

## 河岸の風景

### 「力持」を生んだ佐賀町

江戸時代以来、堀割と蔵に囲まれた佐賀町（佐賀1、2）では荷役人が船荷の米俵や酒樽などを運んでいました。後に荷役から生み出された曲芸が、「深川の力持」（東京都指定無形民俗文化財）として佐賀町の雰囲気至今に伝えています。ここでは、荷役人の稼ぎ場であった河岸地の様子を史料から探ってみようと思います。

その史料は、天保3年（1832）に出された隅田川渡船の開設備いす（「天保撰要類集」第九十一下、国立国会図書館所蔵）。渡船ルートは、西方の清水家屋敷前（中央区日本橋蛸殻町2）と東方の佐賀町河岸上之橋際（佐賀2）とを結び、箱崎の田安家屋敷地先で中洲南際を通るものでした。

佐賀町は、渡船場の予定地とされた上之橋南際には木戸番屋があり、番屋

付近の河岸地は將軍の川筋御成り御用の際に必要な場所であること、他の河岸地にも適地はないとして渡船場の開設に反対しました。

### 佐賀町河岸と貸蔵

佐賀町は河岸地を「御年貢上納沽券地」としていることで、売買が可能な河岸屋敷があったことが分かります。宝暦10年（1760）時の図2には、上之橋から永代橋までの河岸地に並ぶ「河岸屋舗」が見えます。また

図3には、中之橋から下之橋を越えて永代橋に至る佐賀町の河岸地に蔵が建ち並ぶ様子が描かれています。蔵の多くは貸蔵で、武家の米穀や商人の諸荷物を保管してました。例えば中之橋南角（佐賀2）に屋敷地を所有する三井家では、



図1 「本所深川絵図」（江東区教育委員会所蔵）

三井家では、

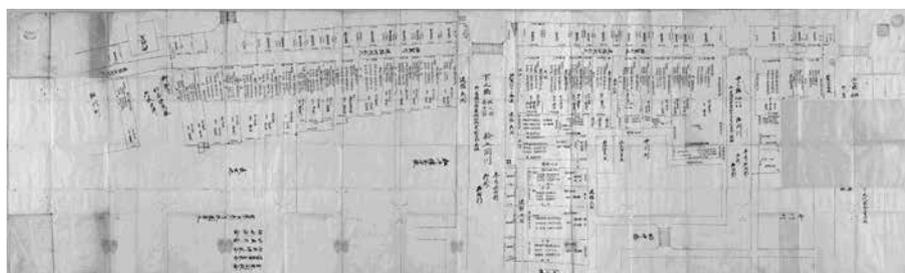


図2 「深川佐賀町惣絵図」（嘉永3年・1850写、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）

文化4年（1807）頃には30棟もの蔵をもって貸蔵経営を行っていました。

貸蔵を目指して、日々、廻船瀬取船や高瀬船下船など荷物を積んだ船が岸に寄せていました。また河岸地面（荷揚場）は、荷物を蔵へ出し入れする小揚人足らで混雑してました。

佐賀町は、このような場所に渡船場を作られては、荷物を積んだ船が渡船場付近の岸へ寄せることができなくなり、また渡船を利用する往来人が多くなると荷揚げ作業に差し支え、ひいては渡船場付近の貸蔵経営が衰微して沽券高（土地の売買価格）が減ってしまう恐れから渡船場開設に反対したのです。

### 清住町河岸と船手筋渡世

反対を受け、願人は清住町河岸（清澄1）での渡船場開設を願い出ました。清住町の河岸地は冥加上納の場所、住人らは家前の河岸地に納屋・置場などを設けたいものの、道が狭いため家作普請の時や貸蔵荷揚げなどに



図3 「菓子話船橋」（天保12年・1841、江東区教育委員会所蔵）

邪魔になるのであるべく建てずに空けていました。幕府への冥加銀上納は、文政7年（1824）に決められたもので（「町方書上」）、清住町が公儀地である河岸地の利用権を追認されていたことを示しています。そして清住町は、住人に「船手筋渡世」の者が多く、家前の河岸地先に船をとめていることから渡船場設置に反対しました。

### 「蔵の街」佐賀町

佐賀町と清住町は、文政期（1818〜30）に漁師が居住する「浜十三町」と呼ばれる町々には入っておらず、この頃には深川獵師町といっても漁業との関わりは薄かったようです。ですから、清住町の「船手筋渡世」とは、高瀬船などと河岸とを往復して諸荷物の積み送りをする船下稼業のことと考えられます。そして、佐賀町では貸蔵経営が展開していたので、両町では流通に関わる者が多かったと言えるでしょう。なかでも佐賀町が蔵の街として発展したのは、清住町に比べて河岸地が広いこと、熊井町（永代1）と同様に宝永元年（1704）には河岸地での自由な家作が認められた可能性が高いこと、中之堀・油堀により後背地との接続が容易で舟運に便利であることなどが理由として考えられます。

（文化財主任専門員 栗原修）

# 関東大震災以前の石造燈明台

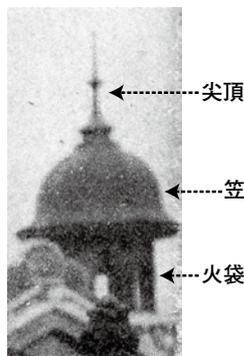
明治31年（1898）7月、日清戦争の戦勝記念として、深川不動堂境内の南東に石造燈明台（以下、燈明台）が建てられました。大正12年（1923）9月に起きた関東大震災と昭和20年（1945）3月の東京大空襲で被災しましたが、基台（煉瓦造石張り）は残りしました。平成20年、同堂の西に隣接する深川公園に移設され、現在に至っています⑧（本誌No.246を参照）。

関東大震災以前の燈明台の写真は近年までほとんど確認されていませんでしたが、『絵葉書で見える江東百景―深川公園―』（平成29年3月刊）を編集する時に3点の絵葉書①～③に写っていることが分かりました。絵葉書の発行時期は①が明治33～40年（1900～07）頃、②が明治40～大正7年（1907～18）頃、③は大正2年（1913）5月頃で、①は南、②は西、③は南東から写したものです。それぞれ、燈明台の基台は見えないものの八角錐のドーム状の笠（屋根）と火袋が写っています。笠の上には尖頂が伸びており、火袋はアーチで結んだ

アーケードで支柱は8本と考えられます。『帝都復興記念帖』（復興局、昭和5年）には大正11年に撮影された航空写真④が掲載されており、①～③と同

形状と分かります。同書に掲載の昭和3年（1928）10月～同5年3月頃に撮影された写真⑥および『大正十二年九月一日 関東大震災記念写真帖』深川区』（日東新聞社、大正13年）掲載の写真⑤を見ると、震災によって火袋の一部と笠が失われている状況が分かります。『深川成田山写真帖』（成田

山不動堂、昭和15年）掲載の写真⑦を見ると、不動堂の復興整備（昭和15年終了）時に笠と火袋が復元されたことが分かりますが、震災以前に比べ笠が低く造られ、尖頂は見えません。その後、東京大空襲で被災し、再び笠と火袋の一部が失われたと考えられます。（文化財専門員 野本賢二



③ 絵葉書  
「深川芸妓鳥追競争（大正二年五月十一日深川公園）」



② 絵葉書  
「Parc d' Asakusa, Tokyo.」  
※実際は深川公園



① 絵葉書  
「東京名所 深川不動尊」



④ 震災前の深川八幡宮附近（一部）「帝都復興記念帖」



⑧ 現在  
（2019年4月撮影）



⑦ 「燈台 石工燈明講」  
「深川成田山写真帖」



⑥ 復興せる深川不動堂及バラック建深川八幡宮附近（一部）  
「帝都復興記念帖」



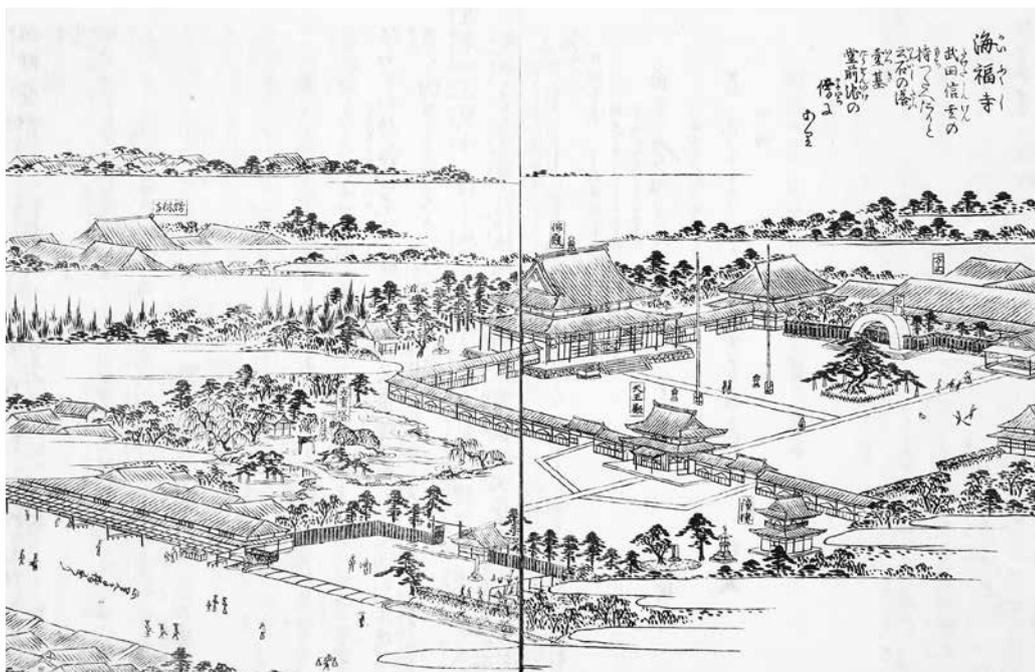
⑤ 霊頭を以て誇った深川不動尊焼跡の景（一部）  
「大正十二年九月一日 関東大震災記念写真帖 深川区」

# 海福寺の目黒移転と

## 馬頭観音

清澄通りの仙台堀川にかかる海辺橋は、元禄12年（1699）に木置場が

町人地として整備（元木場）された時に架けられたと考えられています。そ



海福寺（「江戸名所図会」）



本所深川絵図（部分）

間あたりに、江東区立明治小学校があります。

この明治小学校が建っている場所にも、かつては海福寺という黄檗宗の寺院がありました。江戸幕府によって作成された「深川寺社書上」（旧幕引継書、国立国会図書館蔵）によれば、寺の創建は万治元年（1658）で、中国大陸から日本に来た高僧隠元禅師によるものとされています。また、明治42年（1909）の『新撰東京名所図会』には、寛永5年（1628）に僧侶道

安なるものが海福寺を創建し、その時は真言宗の寺院であったものが、隠元禅師が来日した時に「請うて」開山としたため、黄檗宗となったとしています。寺の方丈の前には石門が配置され、寺の池のほとりには武田信玄が持っていたとされる石造の九重塔があるなど、大きな境内でした。

ところが、明治43年（1910）に海福寺は深川から目黒

へ移転しています。

翌44年、海福寺跡に建てられたのが明川高等小学校でした。これは明治高等小学校（明治19年に明治学校に併置）と深川高等小学校（明治16年に深川学校に併置）が合併して誕生したものです。明治学校は陽岳寺境内に設けられた深川閻校（明々館）がその始まりで、明治6年の学制頒布によって公立小学校となりました。そして、明治10年に深川万年町に校舎を新築し、明治学校と改称しました。この明治学校の隣接部分が明川高等小学校となったのです。大正9年（1920）、明川高等小学校は西永町（現平野）へ移転し、その後明治第二尋常小学校が新設されます。これによって、明治尋常小学校は男子部、第二尋常小学校は女子部となったのです。

明治第二尋常小学校が創立された翌大正10年5月26日、全校1000名余で千葉県市川方面へ遠足に出かける際、市川駅構内にいた荷馬車の馬が突然暴れ、女子児童2名が死亡、1名が重傷を負う惨事が起こりました。翌27日付の読売新聞によれば、市川から小学校と深川区役所に急報があったため、植木武彦深川区長と太田信次郎深川区議会議長らが自動車現地へ急行し、現場で引率していた教員らと協議

し、残りの生徒を帰らせる手筈を整えました。また、重傷の児童と亡くなった児童の亡骸を運ぶ手配を整え、それぞれの保護者を乗せて市川に向かっていきます。通報を受けた保護者は小学校に集まって騒然としたことが記されています。

2日後の28日、平野町の浄心寺にて亡くなった児童2名の葬儀が行われますが、この葬儀は深川区葬として執り行われ、葬儀委員長は太田区議会議長が勤めています。深川各宗聯合会をはじめ、芝増上寺や本所回向院の僧侶100名も参列するという厳かなものとなりました。ところが、この葬儀の



大正9年3月卒業記念アルバムより(校舎と運動場)

撮影をしていた写真館主がフラッシュの発火剤が大爆発を起こしたため大やけどを負い、そばにいた撮影助手と女子児童2名が負傷したのです。その後、海辺橋でも馬が急に暴れたために明治小学校の児童が2名死亡する事故が起こっています。

昭和8年(1933)4月25日付の「桜東新聞」には市川駅の事故から始まった一連の出来事について触れた記事がありますので、内容を紹介します。海福寺が目黒へ移転する際、石くりに混じって馬頭観音の碑が残されていました。おそらくそのままであれば処分されるところを、冬木町に住む材木問屋鈴木壽三郎氏の目にとまりました。この壽三郎氏は有名な愛馬家であつたこともあり、移転作業の請負人と交渉してこの馬頭観音を買って、自宅の庭内に安置して朝夕参拝していました。

その後、前述のとおり、市川駅や海辺橋で複数の児童が亡くなる事故が起こりました。そして、明治第二尋常小学校に通っていた清住町の油商宮村氏の女兒が、ある日学校から帰ると「馬がこわい」といって急に熱を出し、医者や薬の治療も効かなかったという出来事が起こります。この時、宮村夫妻の夢枕に馬頭観音が立ったという話

が世間に広まると、その馬頭観音は冬木にあるということが分かったのです。果たして壽三郎氏の庭内にあつた馬頭観音のことでした。この馬頭観音を元海福寺境内、すなわち学校の庭内に移転してお祀りしようという話が起こり、東京市議や深川区議などが尽力、深川区長や学校長の了解を取り付け、5月23日に馬頭観音を学校内に移転し、僧侶が読経をして供養を行いました。記事の最後には「不思議にも今度同観音が安置された場所は以前海福寺のあつた当時同観音が安置されてあつた場所で自然元のところへ立帰った訳である」と記されています。



馬頭観世音供養塔(江東区登録有形民俗文化財)

現在、明治小学校内にある馬頭観世音が世間に広まると、その馬頭観音は冬木にあるということが分かったのです。果たして壽三郎氏の庭内にあつた馬頭観音のことでした。この馬頭観音を元海福寺境内、すなわち学校の庭内に移転してお祀りしようという話が起こり、東京市議や深川区議などが尽力、深川区長や学校長の了解を取り付け、5月23日に馬頭観音を学校内に移転し、僧侶が読経をして供養を行いました。記事の最後には「不思議にも今度同観音が安置された場所は以前海福寺のあつた当時同観音が安置されてあつた場所で自然元のところへ立帰った訳である」と記されています。

現在、明治小学校内にある馬頭観世音が世間に広まると、その馬頭観音は冬木にあるということが分かったのです。果たして壽三郎氏の庭内にあつた馬頭観音のことでした。この馬頭観音を元海福寺境内、すなわち学校の庭内に移転してお祀りしようという話が起こり、東京市議や深川区議などが尽力、深川区長や学校長の了解を取り付け、5月23日に馬頭観音を学校内に移転し、僧侶が読経をして供養を行いました。記事の最後には「不思議にも今度同観音が安置された場所は以前海福寺のあつた当時同観音が安置されてあつた場所で自然元のところへ立帰った訳である」と記されています。



明治小学校敷地にたつ海福寺跡の観光高札

## 古写真の中の江東

# 江東区の映画館

現在、区内にある映画館は、木場と豊洲、二箇所のシネマコンプレックスだけとなっていますが、昭和27年には7館、昭和33年には15館ありました。ちなみにこの年は、映画の観客年間動員数は1億人を超え、絶頂期を迎えていました。



①千田シネマ

千田にあった「千田シネマ」(千田22)もかつて区内にあった映画館の一つです。①は、現在の美術館通りから四つ目通りをはさみ、交差点の西から東に向かって撮影しています。千田シネマは交差点の角地にあり、近くには都電の停留所(千田町停留所)があり、立地に恵まれたと言えますが、昭和40年代の前半にはなくなっています。昭和40年代以降、映画産業は次第に衰退しました。

## 上映した映画は何か？

ここで①の中心部に注目すると、看板が確認されます。拡大すると、千田シネマで上映中(もしくは上映予定)と推定される映画がみられます(②)。



②看板の拡大写真

看板右の「大 江戸人気男」(大映製作)・看板左上の「肉体の反抗」(日活製作)は、いずれも昭和32年5月

公開の映画です。一方で、看板左下の「サザエさん」は、歌手江利チエミがサザエさんを演じた実写映画シリーズ(東宝製作)の一つとみられます。このように看板に注目すると、①は昭和32年5月以降に撮影された可能性があります。また、千田シネマは、新作映画を初めに上映する映画会社の直営館(封切館)ではなく、遅れて上映する二番館・三番館と考えられます。こうした映画館では複数の会社の作品を同時上映もしました。

このよう全景からも得られる情報は多いのですが、改めて細部にまで注目してみると、古写真は当時の世相などをより深く知る手掛かりを提供してくれます。

(文化財専門員 功刀俊宏)

## 文化財説明板の紹介

文化財係では江東区登録史跡や江東区指定文化財の所在地に文化財説明板を設置し、その歴史や文化を紹介しています。平成30年度は史跡説明板1基を修繕し、1基を新たに設置しました。散策の際などにご覧ください。

### 旭焼製造場跡・瓢池園陶磁器工場跡

明治以降、日本では絵付けの技術が向上し、精緻な表現が可能となりました。深川には二つの工場がありました。一つは旭焼製造場で、主に暖炉の装飾タイルを製造しました。もう一つは瓢池園で、瀬戸や有田等の産地から素地を買い入れ、絵付けを施しました。この説明板では二箇所の工場について言及しています。

説明板は平成10年に設置され、その後、同30



年12月に修繕し、図版・文章を更新しました。現在、森下3丁目第三児童遊園内に設置されています。

### 閻魔堂橋跡

閻魔堂橋は、油堀に架けられた富岡橋のことです。通称「深川閻魔堂」と呼ばれた法乗院(深川2-16-3)へ通じる道であったため、閻魔堂橋と呼ばれ、為永春水(1790-1843)の人情本『春暁八幡佳年』、河竹黙阿弥(1816-93)の歌舞伎「梅雨小袖昔八丈」(通称「髪結新三」)など江戸の文芸や芝居の作品中に取り上げられ親しまれました。文政頃(1818-30)の規模は、長さ10間3尺(約19メートル)、幅1丈3尺(約4メートル)となっていました。その後、明治34年(1901)に、東京市区改正による道路新設にともない廃橋となりました。

文化財説明板は、深川1丁目3-3の植込み内に設置されています。

